

矢田の宝篋印塔所在地発掘調査報告

1992年3月

岡山市教育委員会

『矢田宝篋印塔發掘調查報告』正誤表

頁	行	誤	正
1	24	巖津政衛門	巖津政右衛門

序

岡山市は古代に花開きました吉備文化以降、不断の歴史的発展を遂げて今日の姿に至っており、その証しともいべき多種多様の文化遺産が文化財と呼ばれる形や状態で所在しております。文化財の保護保存は現代社会の経済成長や生活様式の変革に伴う宿命的な社会問題となつており、行政課題として文化行政の中心的な施策となっております。

岡山市教育委員会は、地域開発の増加と生活環境の近代化が止まることを知らぬ今日的状況の内で、文化財を市民共有の文化遺産として保護保存を図り、子孫への継承に努めているところであり、過去・現在・未来に亘る行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意取り組んでいます。現在、市域には国・県・市の各段階を合わせて184件の指定文化財が所在しており、それらの望ましい保護保存と管理に努めています。

このたび報告いたします矢田の宝篋印塔所在地は、宝篋印塔が市の重要文化財に指定されて、行政面からは制度的にも保護保存の講じられていた訳でしたが、岡山県の今日的行政施策により現状保存の困難になった、岡山市指定文化財「矢田の宝篋印塔」の移転に伴う所在地の発掘調査の成果であります。宝篋印塔自体は移転の上再現されて保存が図られ、所在地も埋蔵文化財の記録保存の施策が講じられたとはいえ、このたびの市指定文化財の移転保存に関しては、文化財保護行政からは問題を残したような気がいたします。

発掘調査につきましては、市文化財保護審議会の各委員の御指導と関係者各位や所有者、さらに発掘参加者の御支援のもとに実施され、矢田の宝篋印塔の実態を明らかに致しております。この成果は発掘に際しての関係者の皆様方の御指導と御支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、御検討・御批判をいただき、少しでも岡山地方の石造美術品の研究に資する事ができますならば幸いに存じます。

平成4年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 奥 山 桂

例　　言

1. この報告書は、一般県道岡山賀陽線（吉備新線）道路改良工事に起因して、岡山市教育委員会が昭和62年度に実施した、岡山市山上に所在する岡山市指定文化財「矢田の宝篋印塔」の移転に伴う発掘調査の報告である。
2. 作成は、岡山市教育委員会社会教育部文化課が実施し、その執筆は扇崎由が担当した。
3. 造構の実測は、根木修・扇崎・草原孝典が、遺物の整理・写真撮影及び浄書は扇崎が行い、編集は根木・扇崎が行った。
4. 高度値は、標準海拔高度を用いた。方位は磁北である。

目 次

第1章 立地と環境	1
第2章 発掘調査	2
1 調査にいたる経過	2
2 調査の経過	3
3 遺構と遺物	4
4 まとめ	7
第3章 移転	8

挿 図

第1図 足守・日応寺地区遺跡及び石塔分布図	9
第2図 矢田の宝篋印塔周辺地形図	10
第3図 調査前地形測量図	11
第4図 遺構全体図	12
第5図 土層断面図	13
第6図 矢田の宝篋印塔現地実測図	14
第7図 矢田の宝篋印塔実測図	15
第8図 基礎背面拓影	16
第9図 基壇平・立面図	16
第10図 土壌1平・断面図	17
第11図 土壌2平・断面図	17
第12図 土壌3平・断面図	17
第13図 土壌4・5平・断面図	17
第14図 遺物実測図	18
第15図 矢田の宝篋印塔復元図	19

図 版

第1章 立地と環境

矢田の宝篋印塔は、岡山市山上2632に位置する。岡山市北部の吉備高原の端部ともいえる山間部にあたり、御津町に程近い。塔はほぼ北から南に延びる丘陵南端のほぼ中腹に立地する。とはいって、この中腹に道路が通じ集落も道路沿いから丘陵上部に向けて営まれており、生活面からいえば一段上にあるといった感じである。すぐ南の丘陵との間には、日近川の小支流がながれ小さな谷が形成されており、小区画の谷水田が経営されている。また丘陵上には畠が展開している。

日近川流域の山上・高田・日近地区は、知られている遺跡はそれほど多くない。日近から高田一帯では、低墳丘小規模の前期古墳が10数基丘陵上に築かれている。ところが、後期にいたっては日近地区で2基知られているにすぎない。日近から山上一帯は谷も狭く、古墳時代にあっては生産基盤としてかえりみられることも少なかったのであろうか。各地で爆発的な広がりを見せる後期群集墳の時代にあっても、その營力はやはり若山から大井方面の大井川流域に向けられ、栗井大塚古墳を代表として、丘陵上・裾部をとわず大小の古墳がみられる。

中世には、遺跡としては知られていないがいくつか石塔が残されている。日近川流域では上高田に敷神社があり、ここに石造宝塔がたてられている。花崗岩製で「大勧進沙門正口・貞和二年十月二日・造立之大工妙阿」と銘文が陰刻されている、南北朝期（1346年）の名塔である。また、清重の宝篋印塔は基礎や笠を大きく造り飾りもそらない南北朝期のものである。日応寺には番神堂の横に矢田の宝篋印塔とほぼ同型の宝篋印塔がおかれている。このほか、戦国期の宝篋印塔が、観音院・清重・弓矢馬場などに存在する。

戦国期にはいると、忍山城・信倉城・本陣山城といった、中世城郭が築かれている。

＜参考文献＞

- 『続岡山県金石史』 永山卯三郎 1954
- 『岡山文庫55 岡山の石造美術』 巖津政衛門 1973
- 『岡山市の石造物－岡山市石造物調査報告－』 岡山市教育委員会・岡山市石造物調査委員会 1976
- 『岡山市遺跡地図』 岡山市教育委員会 1983
- 『岡山県の文化財(一)』 岡山県教育委員会 1980

第2章 発掘調査

1 調査にいたる経過

矢田の宝篋印塔は、昭和53年1月岡山市指定重要文化財に指定された。その理由としては、(1)「貞治五年四月十五日」の銘があり、南北朝期の古塔である、(2)姿がたいへん美しく整っている、(3)地上に低い基壇を設け、その上に基礎・塔身・笠・相輪の順序に重ねた宝篋印塔で、各部初原の石が完存している、(4)塔身の正面に阿弥陀如来座像を刻み、右側面に同様手法の地蔵菩薩立像が刻まれていて、他にあまり例がない、ということがあげられた。こうして、矢田の宝篋印塔は市民共有の文化遺産としてこの場所で将来に渡って保存と活用が図られることになり、説明板も設置されて文化財保護行政の施策も講じられた。

指定後数年を経た昭和60年頃に、岡山県岡山地方振興局建設部工務第二課は、当時建設の進行していた新岡山空港（現岡山空港）への上房郡賀陽町からの経路として、一般県道岡山賀陽線の新設ルート（吉備新線）を策定していたが、このルートは矢田の宝篋印塔所在地を通過するものであった。昭和61年の早い時期に、上記の工務第二課から岡山市教育委員会文化課に新設ルート沿いの文化財の存在状況について事前の相談があり、文化課はルート沿いの文化財の存在状況を示すとともに、宝篋印塔に関しては指定文化財であるので文化財保護行政の面から現状保存を強く要請した。しかし、県当局は現状保存のための設計変更やルートの変更の方策は全体のルート変更を來すので不可能であるとして、かえって移転による保存を強く求め両者の主張は平行線をたどったが、県当局は地元の関係者や宝篋印塔の所有者に移転による既定どおりの県道新設を推進していった。そして、工務第二課から昭和61年7月に所有者及び地元関係者の移転同意書を添えて協議依頼があり、8月12日に、文化課は宝篋印塔が市指定重要文化財にあたるので、工事の設計変更等により現状保存をはかるよう教育長名をもって強く要請したが、昭和62年5月、所有者長信瀬四郎氏から、宝篋印塔の移転に伴う現状変更許可申請書が提出された。これをうけ6月、岡山市文化財保護審議会をひらき、1)移転に際しては、専門業者による施工とし、解体移転のうえ完全な復元をはかること、2)現所在地については、移転後発掘調査を実施すること、発掘調査の実施については岡山市教育委員会と事前に協議のこと、という条件を付して許可し、文化課が調査を担当することとなった。

調査の体制

発掘調査主体者	岡山市教育委員会教育長	奥山 桂
発掘調査担当者	岡山市教育委員会文化課長	八木正春
	岡山市教育委員会文化課主幹	三宅輝次
	岡山市教育委員会文化課長補佐	角谷 勉
	岡山市教育委員会文化課文化財係長	出宮徳尚
(調査員)	岡山市教育委員会文化課主任	根木 修
(調査員)	岡山市教育委員会文化課学芸員	肩崎 由

調査に当たっては、所有者の長信漸四郎氏をはじめご家族の方には、毎日のようにねぎらいの言葉をいただき、わずか2名でともすれば寂しく行っている現場を支えていただいた。また古市秀治（岡山大学大学院生）・瀧川重徳・中田宗伯（岡山大学学生）の各氏には、見学にこられたにもかかわらず、無理をいって作業の援助を頼った。深く感謝いたします。

2 調査の経過

宝篋印塔跡の調査は、昭和62年10月14日、塔の現状での記録作業から始めた。21日塔を解体後、塔下の埋納施設を想定し、基礎の中心を基点として、尾根方向及び直交方向に発掘軸を設定し、尾根先端側から掘り始める。塔下からは埋納施設等は検出されなかったが、やや南で炭・焼土のはいる土壙（土壙3）を検出した。記録後、尾根中央方向に掘り広げたところ、27日炭・焼土のはいる小穴（土壙5）及び土師質碗のはいる小穴（土壙4）を検出した。さらに横方向に遺構が広がる可能性は低いと考え、尾根奥側へ折り返して掘り広げた。11月5日尾根中央付近のテラス状を呈していたところで、円形に近い大きな穴とそれをコの字状に囲む30~40cm大の角礫が並んで発見され、これが本来の塔基壇であり、その中央に盜掘壙がうがたれていると判明した。7日基壇南東部で配石土壙（土壙1）を検出、12日発掘全体図を作成。13日尾根奥へ基壇背後をトレッチにて広げ、記録後現地作業を終了する。この日発掘作業と並行して塔の移転作業が行われた。11月17日文化財保護審議会にて現地視察、調査終了。

3 遺構と遺物

現地には、5cmほどの表土層の下西側で20cm東側で50cmほど風化花崗岩の組織を残したばいらん土が堆積し、この下に風化花崗岩の基盤がいる。¹⁾

宝鏡印塔

宝鏡印塔は、尾根の東側斜面のわずかなテラス上に位置していた。花崗岩の延べ石を基壇とし、塔身の阿弥陀如来座像を南東に向けてたっていた。地盤が緩いためか北側に傾いていた。塔の解体後、埋納施設を想定し掘り進めたが、現地表下約70cmで風化花崗岩の地山に達し、この間の堆積土はぐずぐずとした流土であり、埋納施設は存在しなかった。

塔は花崗岩製で、基礎・塔身・笠・相輪からなり、花崗岩延べ石の基壇上に据えられている。基壇は東西両辺に25×85cmの長石を、この向長石ではさんで短石3を配置し、75×85cmに組んでいる。基礎は、正面及び両側面に格状間をもうけている。背面上には「貞治五年」(1366)「四月十五日」の銘がある。²⁾ 上部に二段の壇をもうけ、上面には径8cm・深さ2.5cmのほぞ穴がうがつてある。基部で一辺48cm上面で31cm高さ36.5cmを測る。塔身は、正面に舟形中に阿弥陀如来座像を蓮座上に陽刻し、右側面には地蔵菩薩立像が同様に刻まれている。他の2面には何も施されていない。一辺27cm高さ26.5cmのはば直方体で、上下両面にはぞを作り出している。笠は、上部6段・下部2段に繰り出し、四隅にはとんど外反しない隅飾りがもうけてある。以前の調査によると隅飾りは2弧2重と記されているが、現状では風化のためか確認できない。相輪は、下から伏鉢・請花・九輪・請花・宝珠を一石でつくっている。

石囲み基壇

石囲み基壇は塔から南西に3.5m、塔のあった平坦面の西隣の平坦面に位置する。形状は、尾根先側へやや開くコの字形をし、40~50cm大の花崗岩角礫を横置き一段に、山側(西側)に完存して7石2.1m、北側4石南側2石で、東半は欠損していた。高さ約20cm。山側は、基壇から80cm引いたところをL字状にカットして平坦面を形成し、基壇西半部は、基盤土を削りだしその間に礫をおく構造をとる。現状では、基盤土上には流土が堆積しており盛土は確認されなかったが、東へ基盤が下がって行くため、本来は少なくとも東半部には盛土がなされていたと考えられる。基壇中央には160×120×60cmの略椭円形の盗掘穴がうがたれている。

基壇に直接伴う遺物は検出されなかった。また、盗掘穴についても遺物は検出されず、後述する土壤1との切り合い関係から土壤1よりも新しいということ以外、時期を決定するにはいたらない。

宝篋印塔は、本来はこの石囲み基壇の上に据えられていたと考えられる。塔の正面を塔身に刻まれた阿弥陀如来におき、それを西に向かたとするならば、塔は山を向いていたことになる。

土壤 1

基壇の北東隅に位置する。基盤土上面で確認した。130×80cmの隅丸形を呈し底面は平坦で、内部には20cm大の花崗岩角礫が底面に接してびっしりと、それに土師質鍋や土師質碗の破片がまじえて埋められていた。西隅を基壇中央の盗掘穴に切られるが、基壇との切り合い関係は不明である。

土師質鍋 5 は、破碎していれられていた平底の鍋で 3 / 4 個体ほどある。口縁部はゆるやかに外反したのち端部付近でわずかに内湾させており、口端部は丸みをもたせている。調整は胴部外面はタテハケ内面ヨコハケ、口縁部外面及び口端部は横方向のナデ内面はヨコハケ、底部は内外面ともに不定方向のハケ目を施す。胎土は 0.2~0.5mm 大の長石を含みやや粗い。色調は内外面ともに暗黄褐色、底部は内外面とも暗褐色を呈する。外面には胴部最下部から口端部にいたるまで全面にススが付着している。平底の鍋の出土例はあまり知られていないが、底部から口縁部にいたる立ち上がりの角度や、口縁付近部の特徴から、およそ 14 世紀後半ないし 15 世紀と考えられる。

土師質碗 2・3 は、とともに口縁部の小破片で、残存部は全周の 1 / 8 弱である。胎土は 2~4mm 程度の小礫を含みやや粗く、色調は黄褐色を呈す。口径は 10cm 前後で土壤 4 出土の碗 1 とはほぼ同形と思われる。

金具は断面円形の針金を径 2cm ほどに曲げ、わっかをつくっている。

土壤 2

76×60cm のやや西短辺の短い隅丸の台形の土壤である。埋土上層で花崗岩角礫や須恵器・鍋小片が出土した。須恵器は破片が 1 点のみであるが、流土中から出土したものと接合した。下層からの出土物はみられなかった。

土師質鍋 4 は、口縁部下 6cm の小破片であり全周の 1 / 8 にみたない。口縁部は外反させたのち端部ちかくで内湾させ口端部は丸くおさめている。調整は、胴部外面タテハケ内面ヨコハケ、口縁部外面及び口端部ナデ内面ヨコハケを施す。胎土は 0.5mm 大の長石を含み粗く、色調は赤褐色を呈する。口縁下外面にススが付着している。

須恵質壺は底部・胴部・頸部の破片である。頸部は全周の 1 / 3 他は 1 / 8 ほどの破片である。それぞれは接合しないが互いに同じ部位を持っていると観察される。これにより、やや強引な

がら底部から頭部まで復元して図化を試みた。残存復元高35cmほどのやや肩が張り、頭がくっとしまる壺と思われ、内外面ともにヨコナデ調整、内面下部に指おさえを施し、胴部外面最下部に沈線を一条刻む。色調は灰白～淡灰青色を呈する。胎土は3mm大の砂粒を含みやや粗い。ほとんどが流土中のものであるが1点のみ土壤2から出土し、これが流土中のものと接合した。本来土壤2に伴っていたものが流されたと考えられる。

土壤3

発掘区の北東隅に位置する。北東側は、地形の落ちによって切られており現状で1×1m、復元すると1.5×1mの平面椭円形を呈する。底面は炭が一面に厚さ1cmで埋積し、それに焼土が混じっている。焼土は埋土中にも存在する。南側は落ちに切られているとともに、木の根の影響により土層の観察ができない。残りの良好な北半部では、底面から立ち上がり10cmまでが壁面が焼けていた。火葬址とも想定され底面も精査したが、時期や性格を決定できるような遺物は検出されなかった。

土壤4

土壤5の南西となりの30×15cmの小穴である。底面からほぼ完形の土師質碗1個体が出土した。基盤土上面で検出している。埋土は黄褐色の細砂・シルトで花崗岩の組織が崩れている。

土師質碗1は、高台はなく底部を外面からおさえ、いわゆるヘソを中心からやすれた位置に形出している碗である。底部から口縁部へは内湾しながら立ち上がる。口縁部から下方向への粘土のつなぎ目があり、その対面側では縦に割れ目が走っている。ヘソ部分のつくりは荒く、粘土を指でよせた際にできたものであろうか2×0.5mmほどのすきまがあいている。調整は内外面ともにナデ仕上げで、ヘソを中心としたナデ整形痕が残っている。口径10.1cm、高さ3.6cm、胎土は4～5mmの小礫を含みやや粗い。色調は内外面ともに黄褐色を呈する。14世紀後半ないし15世紀と考えられる。

土壤5

平面60×40cm椭円形の焼土壺である。底面には全面に焼土・炭を検出した。遺物は出土しなかった。基盤土上面で検出したが、土層観察によると40cmほどの立ち上がりがみられた。埋土は、周囲に比べ花崗岩の風化組織がいっそう崩れている。

周辺の小穴

このほか小穴を検出しているが遺物も出土せず、また壇の周開を整然と取り囲み覆い屋を想

定させるというような状況でもない。

遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物としては、図示できなかったが、中世の青磁碗と近世陶器、碗形鍛冶滓がある。青磁碗は口縁部の小破片である。文様はない。釉は浅緑黄色、胎土は精良で灰色を呈する。近世陶器は唐津焼の碗で、高台部・口縁部を欠く胴部の破片である。浅緑色の釉を施し灰色の胎土である。時期は江戸前期。碗形鍛冶滓は12cmほどの塊である。

4　まとめ

矢田の宝篋印塔は、元来は2m四方の石囲み基壇上に造立され、後世現位置に移動されたことが判明した。造立の時期については、石囲み基壇の中心に大きな穴がうがたれていたため、他の遺物によることができず塔の記年銘に頼るほかない。この塔が本来墓塔であったか供養塔であったかあるいは記念塔であったのか定かではないが、大工妙阿により鼓神社宝塔や足守神社鳥居が相次いで造立されることやその技術を継承した石工達の存在が、可耕地としては小さな谷水田や畠地しか持てないような山上地区の小地主層にも造塔の機運を及ぼし、またそれを可能にしたのであろう。そして造立を契機として一時的に相次いで周間に土塹がつくられたと思われる。

注

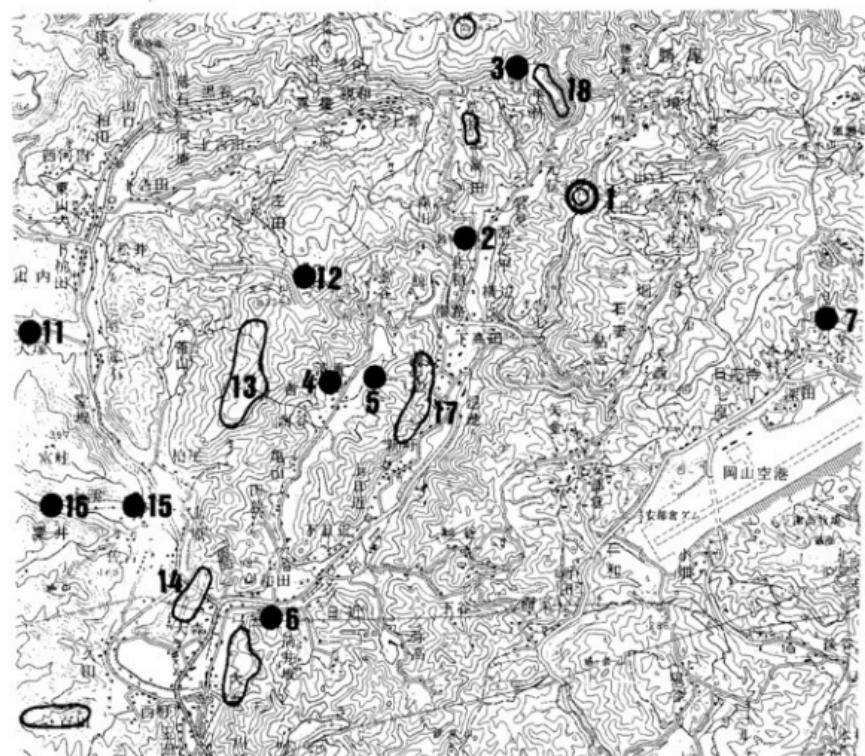
- (1) 表土下の花崗岩バイラン土の流土層では遺構が判別できにくいため、基盤土まで下げて検出をはかった。
- (2) 背面にはこの他、「四月十五日」の左に判読しにくいが「一結衆」やそのほかの銘が刻まれているようである。しかしこれらは年銘の文字とは字体が異なっており追刻の可能性もある。

第3章 移 転

矢田の宝篋印塔は調査終了後、元の位置から北北東約40mの位置に移転した。移転に際しては、調査によって明かとなった石囲み基壇の上に立てることとした。本来ならば塔身の阿弥陀如来を西に向けるべきであろうが、そうすると阿弥陀如来は山側を向くことになるため、あえて谷川の開けた南を向くようにした。これに合わせて基壇の石も検出したものを用い、図面をもとに南側にコの字に配した。不足分は付近でとれる花崗岩を利用した。また組輪については、欠損しているほぞを花崗岩を用いて復元し心棒をいれて固定した。折れていた箇所は接着⁽¹⁾して据えた。

注

- (1) 接着剤にはポリエステル系有機セメント「フジラック」を用いた。



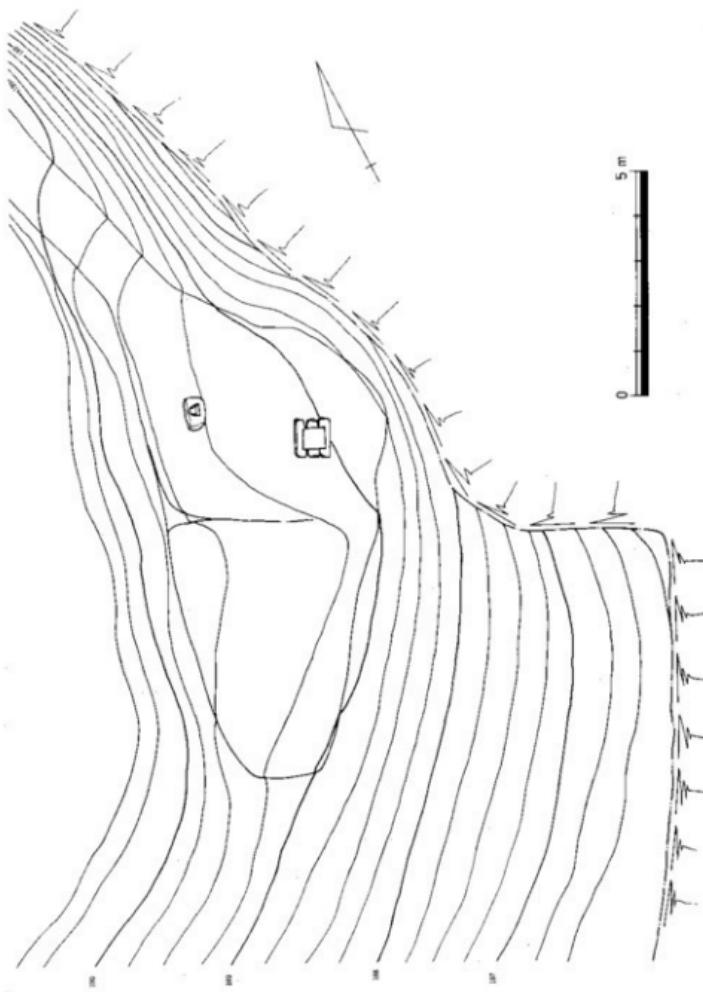
- | | | |
|-------------|-----------------|-------------|
| 1. 矢田の宝篋印塔 | 2. 鼓神社宝塔 | 3. 観音院宝篋印塔 |
| 4・5. 清重宝篋印塔 | 6. 弓矢馬場宝篋印塔(2基) | 7. 日応寺宝篋印塔 |
| 11. 栗井大塚古墳群 | 12. 宮ノ山古墳 | 13. 苔山後期古墳群 |
| 14. 宮山古墳群 | 15-16. 栗井後期古墳群 | 17. 下高田古墳群 |
| 18. 忍山城 | | |

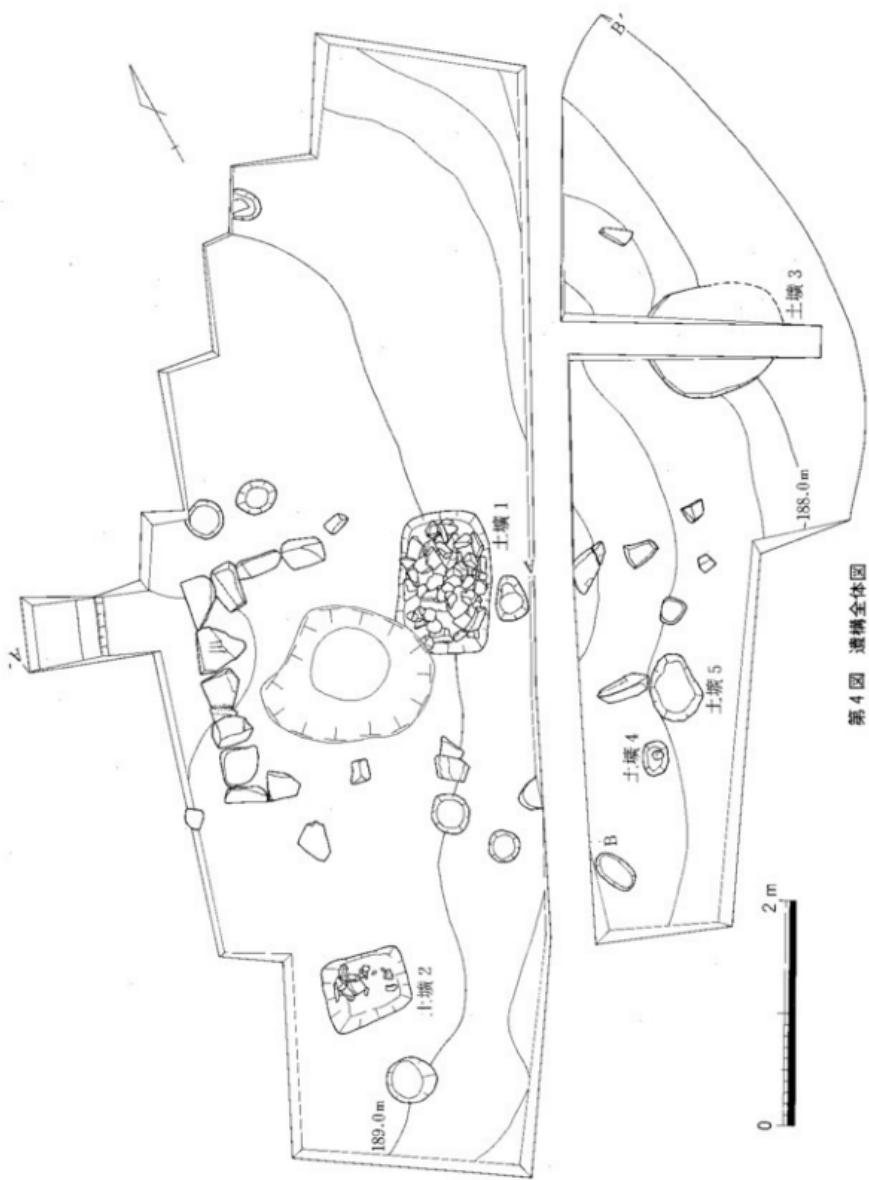
第1図 足守・日応寺地区遺跡及び石塔分布図



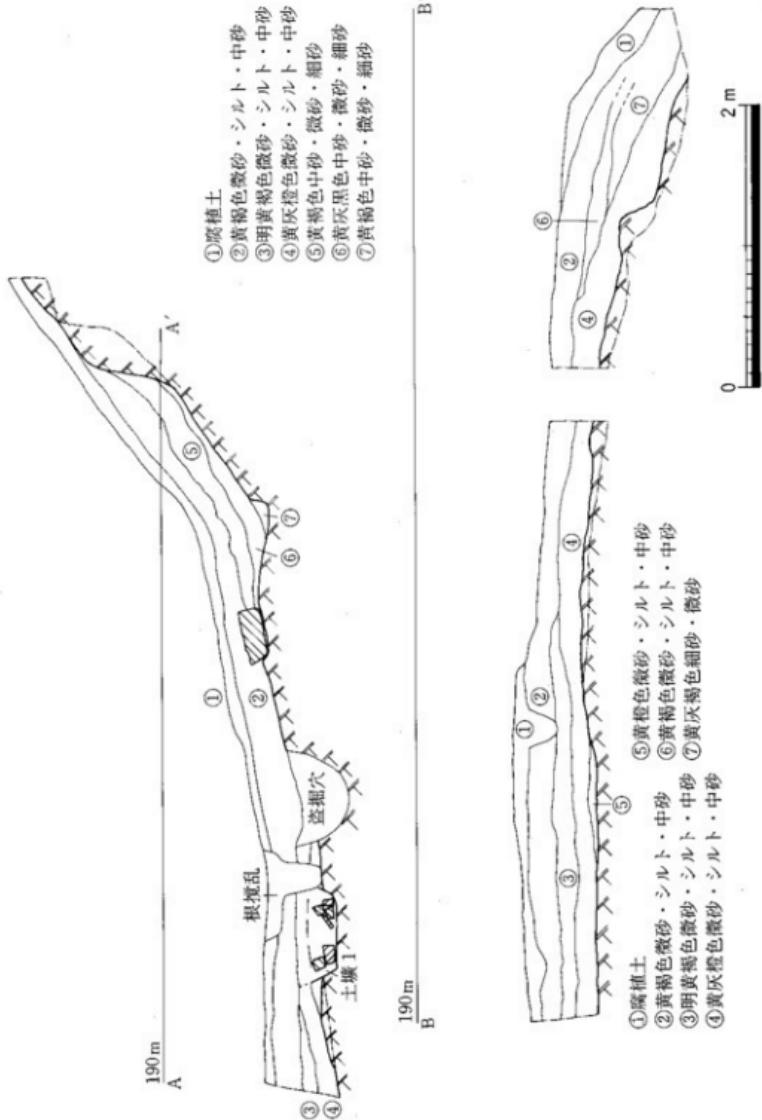
第2図 矢田の宝鏡印塔周辺地形図

第3圖 調査前地形測量圖



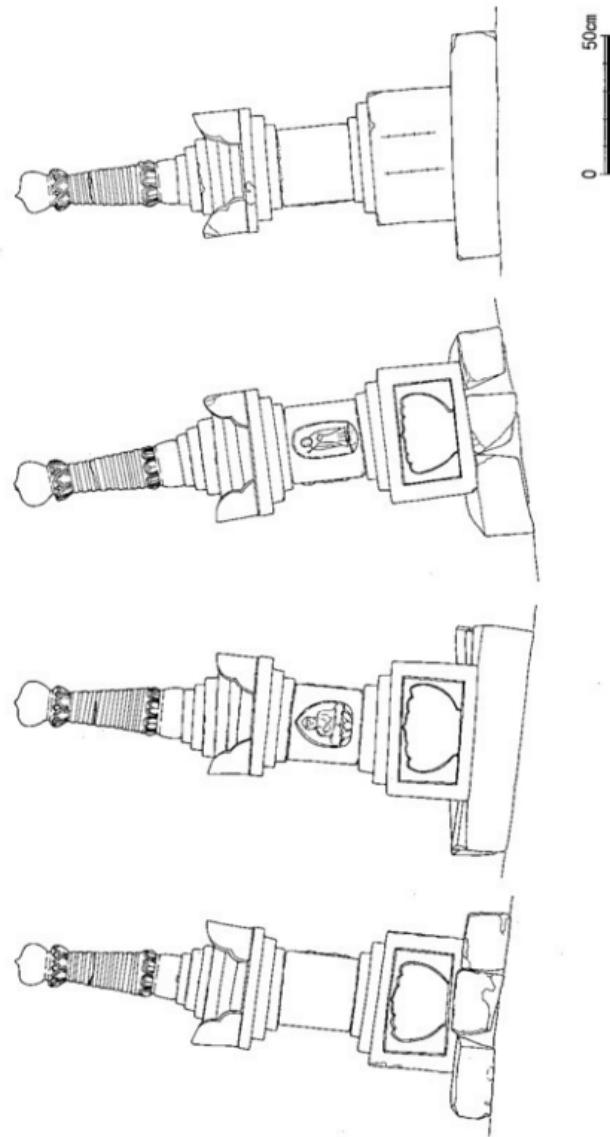


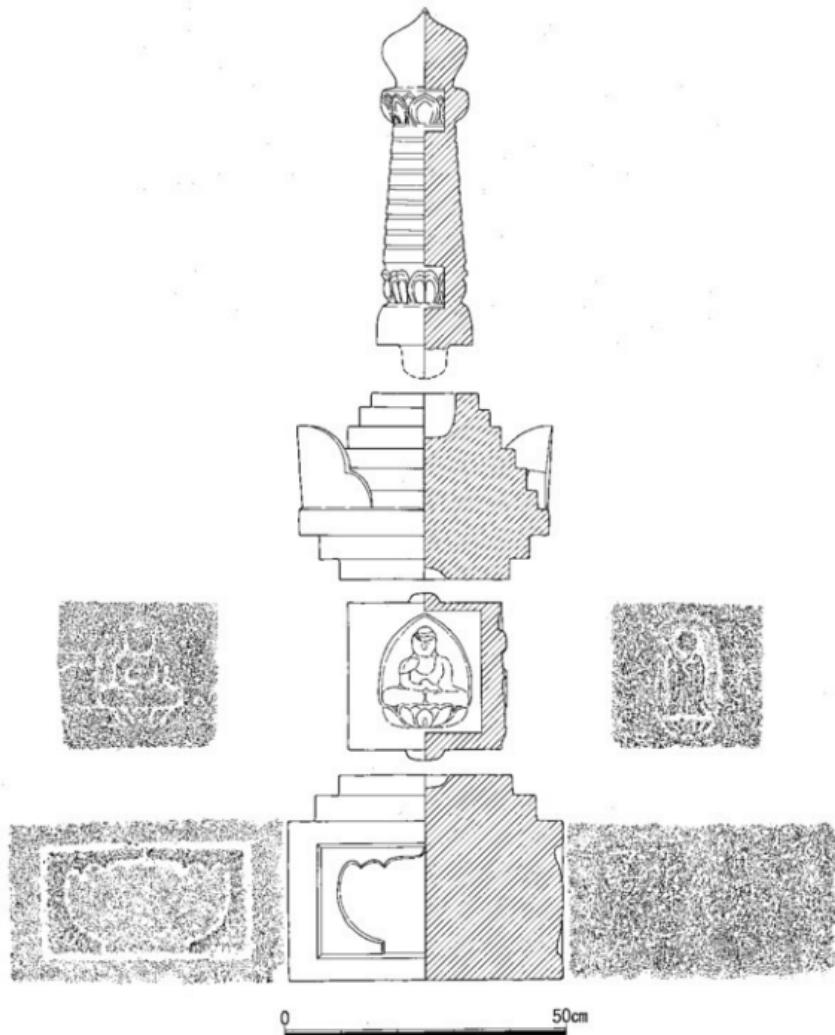
第4圖 遺構全體圖



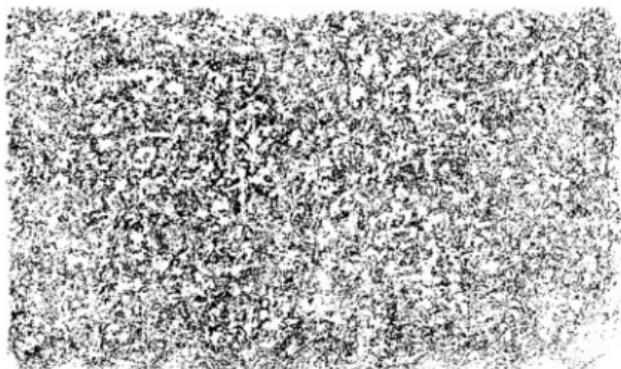
第5図 土層断面図

第6図 矢田の宝鏡印塔現地実測図

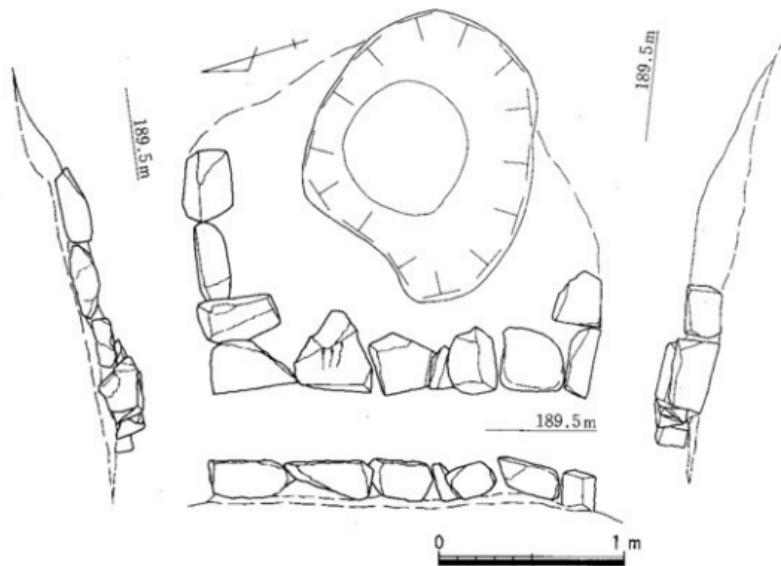




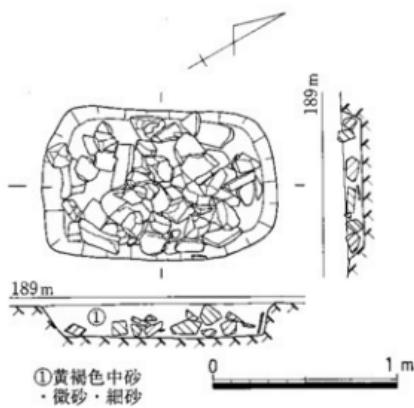
第7図 矢田の宝蔵印塔実測図



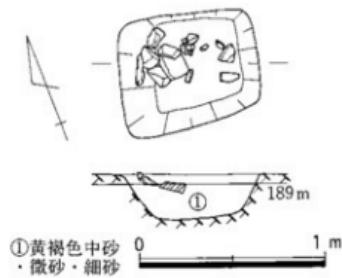
第8図 基礎背面拓影 ($\times \frac{1}{2}$)



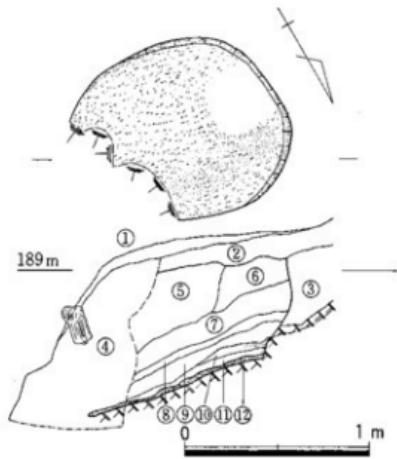
第9図 基壇平・立面図



第10図 土壌1平・断面図

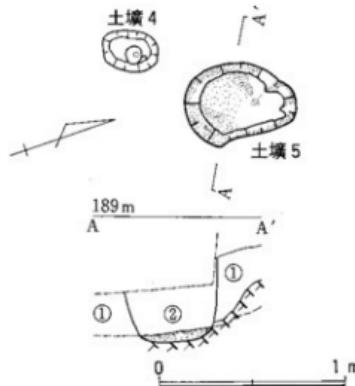


第11図 土壌2平・断面図



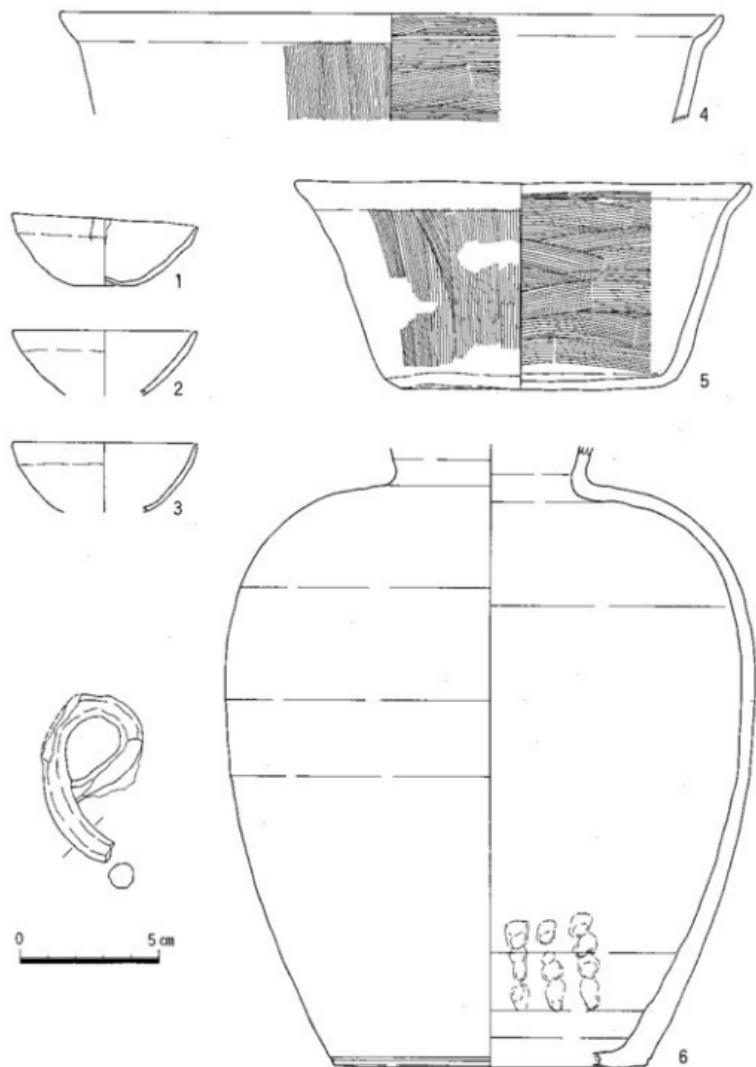
- ①黄褐色細砂・微砂・シルト
- ②黄褐色細砂・中砂・微砂
- ③黄褐色細砂・中砂・微砂
- ④黄灰黑色細砂・微砂・シルト 焼土含む
- ⑤黄灰茶褐色細砂・中砂・微砂
- ⑥白黄色細砂・中砂
- ⑦白黄色細砂・中砂
- ⑧白黄色細砂・中砂
- ⑨黄白色細砂・中砂
- ⑩白黄色細砂・中砂
- ⑪白黄色細砂・中砂
- ⑫白黄(灰黑)色細砂・中砂 炭層 焼土まじる

第12図 土壌3平・断面図

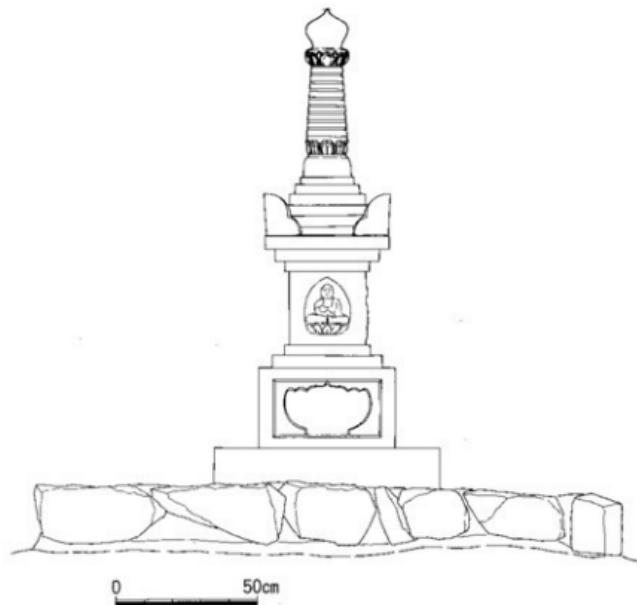


- ①黄褐色細砂・シルト・微砂
- ②黄褐色細砂・シルト・微砂

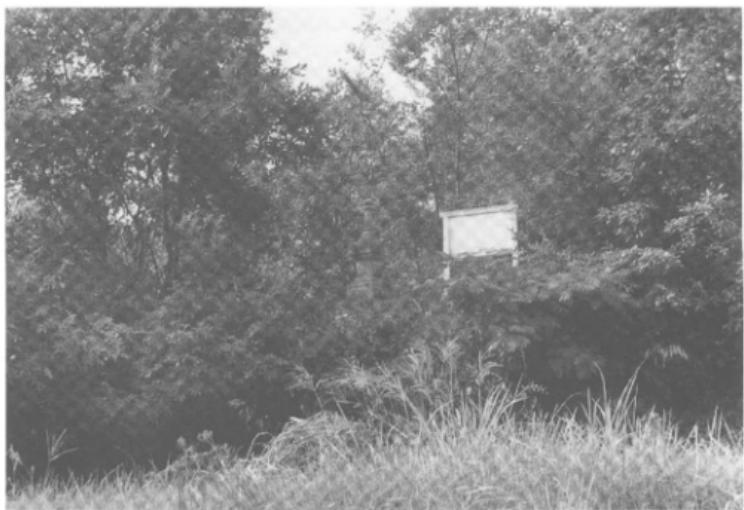
第13図 土壌4・5平・断面図



第14図 遺物実測図



第15図 矢田の宝篋印塔復元図



発掘調査前（東から）



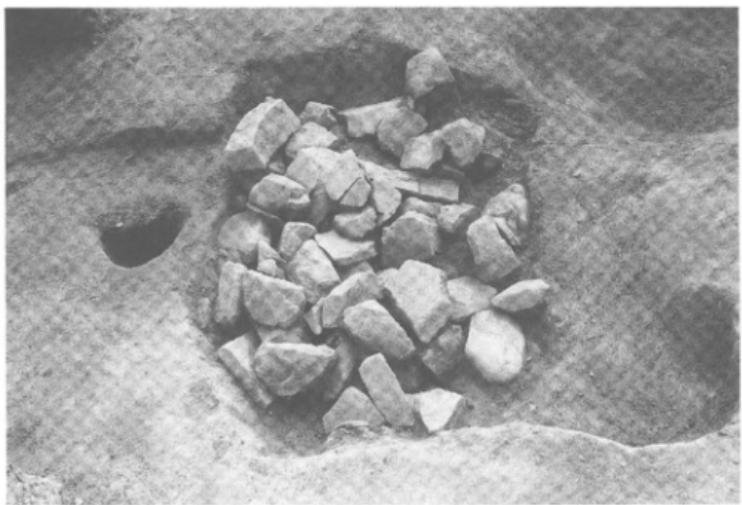
宝陵印塔（移転前）



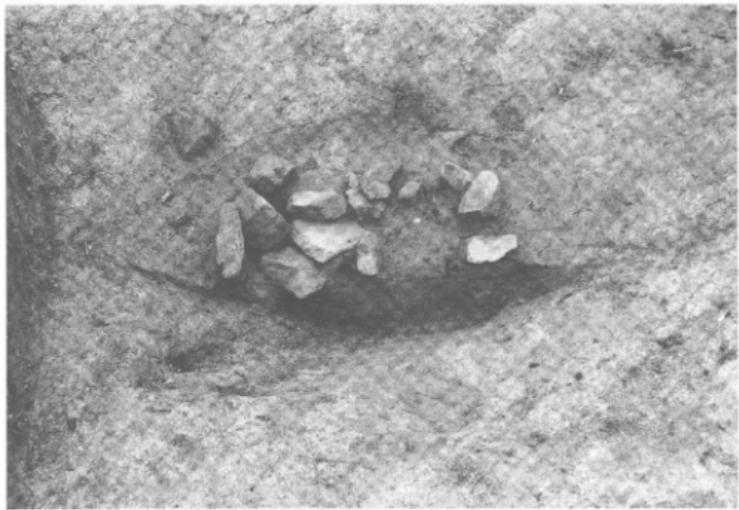
宝幢印塔（阿弥陀）



宝幢印塔（地藏）



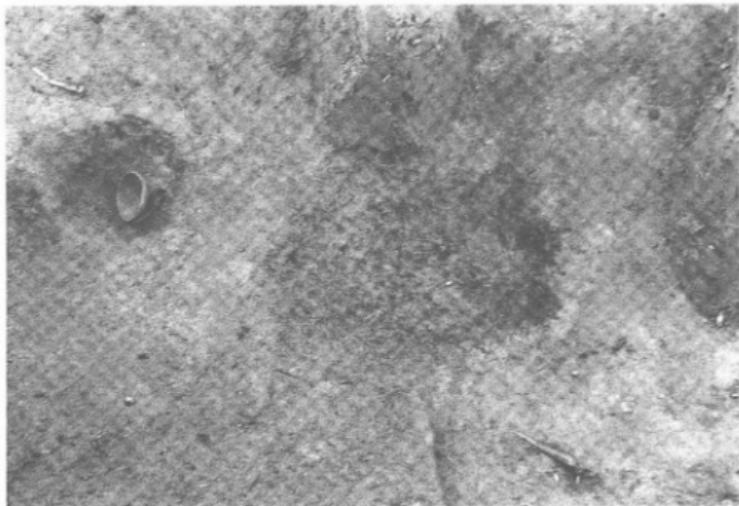
土壤 1



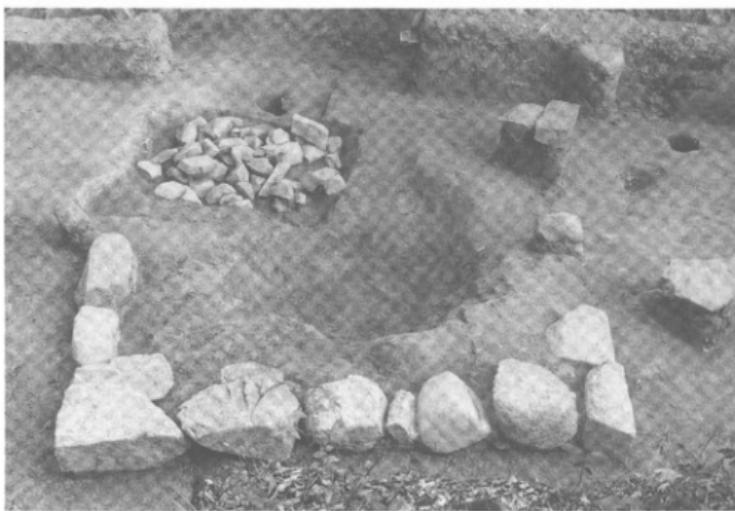
土壤 2



土 壤 3



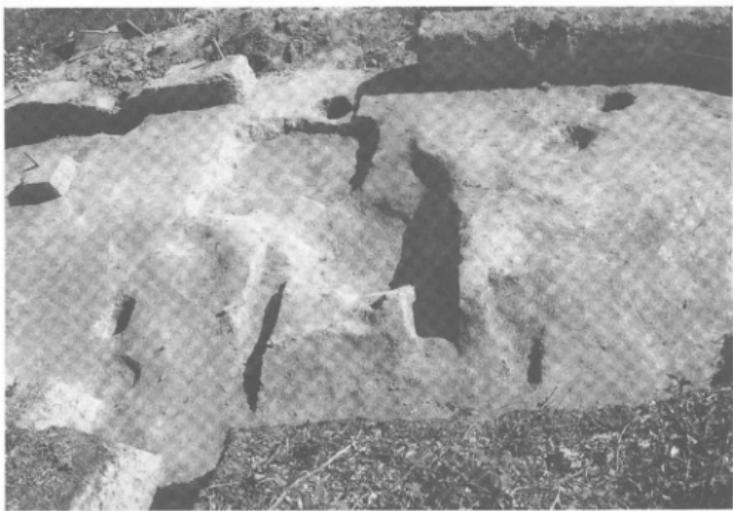
土 壤 4 · 5



基壇と土壤 1



基 壇



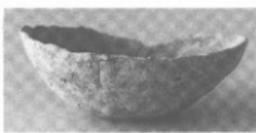
調査終了



宝篋印塔（移転後）



5



1



出 土 物

あとがき

現代社会をもたらせた先人達の不屈の営み——岡山市域においても数万年前から絶えることなく今日まで続けられています。その歴史の豊かさに比例して、多くの文化遺産が形成されていて、今日まで継承されてきていますが、これらは市民共有の先人達の遺産であり、子孫へ伝えなくてはならない財産であり、まさに文化財と呼ばれるものです。

最近の著しい都市開発と生活の近代化は、伝統ある文化や生活様式を喪失させ、自然環境の破壊や公害問題を引き起こしていて、文化遺産に対しても極めて危険な状況を将来させています。岡山市教育委員会の文化課も文化遺産の保護と調査に努めていますが、社会的要求とはいえ押し寄せる近代化の波に翻弄され、時にはろに波を被るのも実状です。こうした状況の下で指定文化財の保護保存や埋蔵文化財の記録保存に主力を注いでいますが、その社会的要求は際限なく押し寄せ、時には恐れさえ感じさせられます。私は、各種の文化財に触る都度にその奥行きの深さと掛け替えのなさを痛感させられ、文化財保護行政の責務の重大さを改めて肝に銘じるところです。

このたびの発掘調査は、新岡山空港建設に関連した県道の新設に起因したもので、市の指定文化財といえども安住の地の無さを見せつけられた行政課題の縮図でした。調査は文化財保護審議会委員の先生方の御指導と、多くの関係者の皆様方の御尽力・御協力により無事終了し、ようやくここに報告書の刊行までこぎつけました。足場の良くない現地での作業を思い出しながら、関係各位にここに感謝申し上げます。

発掘調査の成果はこの報告書にまとめましたが、このたびの経緯が今後の文化財保護行政の糧となるとともに、調査や私達の共有財産である郷土の文化財の理解と認識を深める一助となることを願うものです。

最後に、このたびの発掘調査並びに報告書作成に、厳しい状況下で精力的な取り組みを遂行させた文化課職員の労を多とします。

平成4年3月31日

岡山市教育委員会社会教育部

文化課長 青山淳

矢田の宝鏡印塔所在地発掘調査報告

平成4年3月31日発行

製作・編集 岡山市教育委員会文化課

発 行 岡山市教育委員会

岡山市大供1-1-1

印 刷 広和印刷株式会社